

2018. 3. 1

BUNKA GAKUEN COSTUME MUSEUM NEWS

編集・発行 文化学園服飾博物館

- 服飾・染織資料を「読む」……………1
- 2017年度の活動報告……………2
- 特集……………3
- 2018年度 展示のご案内……………4

たかが服、されど服 … 服飾・染織資料を「読む」おもしろさ！

服飾・染織品は、歴史の流れや人間の営みの中に常に存在し続けています。このため、その文様や形、素材、技法などには、それぞれの時代背景、民族の暮らしぶりや思想、思考などが表れており、服飾・染織資料を通して、その裏側にあるさまざまな事情を読み取ることができます。いつの時代でもどの地域でも、服はただ着ればいだけのものではありません。「装うこと」で何かを表したり、意味を込めたりすることは、現代の私たちも同じです。「服」は口ほどにものを言う…？

一見したただけでは分からない服飾・染織資料を「読む」おもしろさを所蔵資料の中からご紹介しましょう。



1956年12月に行われたチャリティーで岡本太郎が描いたドレス。

■ 「歴史」を語る

和宮所用の提帯（江戸時代末期）



和宮(1846-77)は、仁孝天皇の皇女、徳川家茂の正室。提帯とは上流の武家女性が用いる夏用の帯。この武家独特の形状の帯に皇室の十六弁菊が表されており、和宮の立場や公武合体といった時代背景が表れています。



婚礼祝賀用ナブキン（1660年 フランス）



フランスのルイ14世とスペイン王女マリー・テレーズとの婚礼祝賀の饗宴に用意されたものです。二人の肖像と王家の紋章などが織り出されています。

西仏戦争の講和条約で決められたこの婚姻は、隆盛を極めたブルボン家と、名門ハプスブルグ家の興亡という歴史的転換を示し、ナブキンに織り出された二人がその象徴とも言えます。

左上に王女、その下にルイ14世の肖像



腕時計の文様（エルサレム 1915年頃）



ドレスの袖の文様は腕時計を表しています。第一次大戦後、エルサレムはイギリス委任統治領となり、押し寄せる近代化の波の中で、軍人や役人のつけていた腕時計が文様に取り入れられたのでしょ。

足袋型ストッキング（明治時代後期）



足先部分を足袋のように改造したストッキング。着用者はドレスを着る機会も多い外交官夫人ですが、庭先などで草履も履けるようにしたものと思われる。着物から洋装へと、明治の欧化政策の裏にある女性たちの苦勞が偲ばれます。

ペルーの民族衣装（1980年代）



古くからのこの地域の伝統衣装であるポンチョにスペイン風のジャケットと膝丈のパンツを合わせた男性のスタイル。300年に及ぶスペイン統治は、民族衣装にも影響を及ぼしました。

■ 「自分」を語る

長 袴（江戸時代後期）



武士が出仕に着用する袴には、自身の家系が表されています。この文様は胡麻小紋と呼ばれ、肥前・鍋島家専用とされて他家の使用を禁じた留め柄です。

袴（明治40年）



婚儀の際に着用された袴。着用者の実家の家紋（丸に竹雀）と伝統的な有職文様を組み合わせ、出自を示唆します。

■ 「気候」を語る

女性のパンツ（パキスタン 1980年代）



ウエストまわりが7m近くあるパンツは、ウエストをぎゅっと絞ってはきま。一日の気温差の大きなこの地域では、体とパンツの間に空気をたくさん含ませます。活動量が多く暑い日中は風を送り、寒い夜間は空気をとどまらせて体熱を閉じ込め、一着で暑さと寒さの両方に対処します。



ヨーロピアン・モード

3月11日～5月16日

18世紀ロココ時代から20世紀末まで、ヨーロッパを発信元とする約250年の女性モードに焦点をあて、その流行と変遷を、社会構造の変化や産業の発達といった背景とともに紹介しました。また今回は変遷の中で「黒」のドレスにも注目しました。

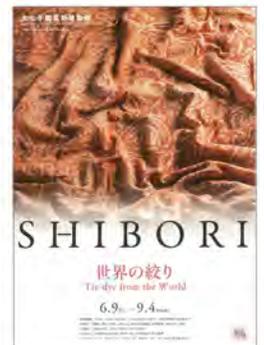
19世紀後期に流行として受け入れられた黒のドレスや、1950年代にデザイナーたちが黒一色のシンプルなものにも個性を光らせた「リトル・ブラック・ドレス」など、黒のドレスにもそれぞれの時代が反映していることが分かりました。



世界の絞り

6月9日～9月4日

本展では、所蔵品の中から28か国、130点あまりの多彩な絞り染めを紹介しました。絞り染めという一つの染織技法に注目することで、地域による特徴や違い、地域を越えた共通点などが浮き彫りとなり、それぞれの民族の歴史や知恵、アイデンティティ、美意識といったさまざまな要素が反映していることが分かりました。絞り染めの製作過程を、動画と製作途中の実物で紹介するコーナーでは、普段目にするのことがない作業の大変さを実感していただきました。



更紗のきもの

10月3日～11月21日

本展では、江戸時代から現代までの更紗のきものと、それらの元となったインド更紗、またインド更紗の影響から製作されたそれぞれの国の特徴ある更紗を紹介しました。更紗は重要な交易品の一つとして多くの地域に運ばれたため、当時の世界情勢とその影響を垣間見ることができました。また22種のインド更紗を縫い合わせた三井家伝来の小袖や、小さな更紗布を貼り込んだ裂帖からは、日本人の更紗布に対する愛着が感じられ、それらは現代のきものにも引き継がれ、時代が変化しても更紗独特の情趣が好まれ続けていることが実感できました。



寒さと衣服

12月19日～'18年2月15日

本展の第1室では、アジアやヨーロッパの寒い地域の民族衣装を、衣服の形状や素材への加工、組み合わせ方や着装方法など、寒さに対処するためのさまざまな知恵や工夫を紹介しました。第2室では、江戸時代から昭和時代までの、日本の防寒服の数々を見ていきました。また動画コーナーでは冬の衣服素材であるコーデュロイ・別珍が作られる過程をご覧いただきました。来館者からは「科学の知識ではなく、経験に基づいた防寒の工夫に納得した」といった感想が寄せられ、冬を快適に過ごすヒントを見出していただけただけようです。



「寒さと衣服」展示関連イベントを行いました。

「寒さと衣服」展を開催中の2月3日（土）に、「冬素材【コーデュロイ・別珍】の手剪毛実演・体験」を行いました。星野秀次郎氏（静岡県別珍・コールテン剪毛工業組合元理事長）の指導のもと、よこパイル織物の毛羽を立たせるために糸を切る工程を、専用のナイフを使って体験していただきました。参加者からは「織り目に沿わせてまっすぐ切るのが難しかった」「コツをつかむまでが大変」といった感想が寄せられましたが、指導者とも会話を交えながら楽しい時間を過ごしました。



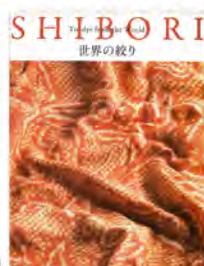
指導者による実演



実演の後、指導者とともに体験をする参加者

『世界の絞り』を刊行しました。

6月から開催された展覧会「世界の絞り」に合わせ、図録『世界の絞り』を刊行しました。この図録は、当館所蔵品から28か国の絞りの優品を紹介するものです。これまでに刊行した『世界の刺繍』、『世界の藍』、『世界の紺』の姉妹書として、一つの染織技法に注目しながら、世界の豊かな表現や多彩な美を見比べることができます。



『世界の絞り』 ¥1,000

『世界の服飾文様図鑑』を刊行しました。

文化学園服飾博物館の編著による『世界の服飾文様図鑑』（河出書房新書）が7月19日に刊行されました。本書は、さまざまな地域の服飾文様に込められた意味を、当館所蔵の染織資料の図版とともに紹介するもので、2012年に1年間にわたって新聞掲載したコラム「文様の美」を大幅に改編、加筆したものです。オールカラーの豊富な図版で分かりやすい内容となっています。



『世界の服飾文様図鑑』 ¥2,592（河出書房新社）

染織資料の色って…？

服飾博物館では、これまで「赤い服」「世界の藍」など、衣服や染織品の色や染料に焦点を当てた展覧会を開催してきました。衣服や染織品を構成するための要素として「色」は欠かせないものです。また、国や民族によって、それぞれの色に対して持つイメージや考え方、使われる染料やその作り方もさまざまです。今回は染料と色について、注目してみました。



「世界の藍」展



「赤い服」展

染色には古くからさまざまな国や地域で植物や虫、貝などが使用され、これらは天然染料と呼ばれています。代表的な天然染料には赤系は茜、紅花、蘇芳、コチニール、ラク、青系は藍、ウオード、紫系は紫根、貝紫、ログウッドなどがあります。



蘇芳



ラク



藍



紅花

天然染料はタンパク質に染まりやすい性質をもっているものが多くあります。絹は蚕（カイコガの幼虫）の繭から作られるタンパク質を主成分とする動物性の繊維なので、天然染料で良く染まります。木綿や麻は植物から作られる繊維なので、天然染料で染める前にタンパク質を補う必要があります。あらかじめ生地に牛乳や豆の搾り汁といったタンパク質を含む材料を染み込ませることで、染料が布によく定着するようになります。この牛乳や豆の搾り汁のように染色効果を高めることを助ける材料を「助剤」といいます。他にも酢酸やミョウバン、灰汁などの様々な助剤が使用され、助剤の種類や濃度によっても色味は変わってきます。このような様々な要素が絡み合い、染織資料の「色」は出来上がります。



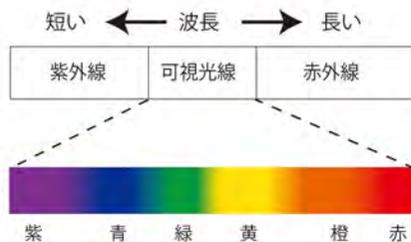
蚕の繭



インド更紗(部分)
19世紀末-20世紀初め

花の部分は茜を染料とし、助剤を変えることで赤と紫色に染め分けられている。赤はミョウバンを助剤とし、紫色はミョウバンと鉄を助剤とする。配合比率によって紫の色味の調整ができる。

しかし、染織資料の「色」を見ただけでは、どんな染料を使って染色したのかわかることは困難です。そもそも「色」とは何なのでしょう。色は、光の波である「波長」の吸収の違いによって赤、緑、青などに見えます。赤色は波長が一番長く、緑、青、紫の順にだんだん波長が短くなります。この人間の眼で見ることのできる波長を「可視光線」といい、眼では見ることのできない波長は紫外線や赤外線と呼ばれています。



可視光線は目に見える波長。可視光線よりも波長が短いと紫外線、波長が長いと赤外線になる。

この「波長」の長さは「分光測色計」という機械で計測することができます。分光測色計は非破壊（資料を破壊、あるいは損失することがない方法）で計測できるため、貴重な染織資料にも使用できます。どのような染料を使って染色されたか明確な試料を計測した指標となるデータと、染織資料から計測したデータの双方を比較していくことで、人間の眼で見ただけではわからなかった情報が明らかになる可能性もあります。この染料に関する調査を独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所と協力して取り組み、染織資料をより理解できるよう努めています。



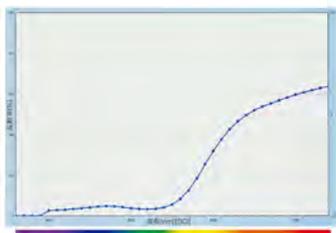
服飾博物館にある分光測色計。ハンディタイプで調査がしやすい。



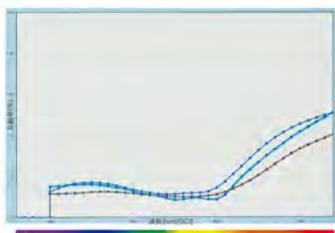
服飾博物館の資料を使った調査。測色箇所を指し示している。



打掛（江戸時代後期）
赤い地色を測定したデータ。



複数の資料の測色結果をひとつのグラフに表記し比較することも可能。



協力：独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所

3月11日～5月11日 * 3/11は開館 4/20、5/11は19:00まで開館

ヨーロッパ・モード

宮廷が流行を生み出した18世紀のロココ時代から、産業の発達や社会の成熟とともに変化する19世紀を経て、大衆が流行の担い手となった20世紀末まで、ヨーロッパを発信元とする約250年の女性モードの変遷を、その社会背景とともに紹介します。

また特集として越路吹雪のドレスを取り上げます。越路吹雪(1924～80)は、日本語歌詞によるシャンソンを普及させ、エレガントな雰囲気と歌声で人々を魅了しました。リサイタルやディナーショーでは最高のパフォーマンスを披露するため、オート・クチュールで仕立てたドレスをステージ衣装としました。本展では、エンターテイナーとしての彼女のこだわりが詰まった約20点のドレスを出品します。



ローブ・ア・ラ・フランセーズ 1760-70年頃

イヴニング・ドレス 1920年代

越路吹雪のドレス 1975年 サンローラン

ドレス 1988年頃 ゴルチエ

越路吹雪のドレス 1979年 ニナ・リッチ

10月5日～11月30日 * 11/3、4は開館、11/5、6は閉館

ブルックス ブラザーズ:

アメリカンスタイルの200年、革新の2世紀

1818年4月7日、アメリカ建国から間もないニューヨークで、1人のおしゃれなアメリカ人がマンハッタンの端に開いた小さな紳士用品店がやがてアメリカで初めての既製服を発売。ボタンダウンシャツやNo.1 サックスーツなど革新的なアイデアを次々と生み出し、クラシックスタイルの基本を築きました。

アメリカで最も歴史あるブランド、ブルックス ブラザーズの創立200周年を記念し、創業当時の台帳や、米国大統領やセレブリティが着用したアイテムなど、貴重な品々の展示で2世紀に渡るアメリカンスタイルの変遷を紐解く初の本格的回顧展です。



1845年に描かれた一号店のイラスト



スティーヴ・マックイーンの顧客カード



1940年代のカタログ



ボタンダウンシャツ



2010年のキャンペーンビジュアル

12月20日～2019年2月16日 * 年末年始休館=12/29～1/6

1/25、2/8は19:00まで開館

華やぐ着物 - 大正、昭和の文様表現 -

大正から昭和の戦前期にかけては、人々の暮らしが豊かになり、自由を求める風潮が広がりました。また、化学染料の普及や動力機械の導入といった染織技術の目覚ましい進歩によって、華やかな色使いの反物が量産され、それまでにはなかった新しい表現も可能となりました。さらに、女性誌の刊行や百貨店の成長は、大衆の間で流行現象を生み出しました。展示では、大正、昭和のきものを中心とし、当時流行した大胆な色柄の銘仙、アール・ヌーヴォーやアール・デコといったヨーロッパの影響を受けたモダンな文様、伝統柄との折衷文様など、拡大する需要の中で花開いた多彩な着物の数々を紹介します。



銘仙の着物 昭和初期



婚着用着物 昭和8年



男児着物 大正時代



薔薇文様の羽織 昭和10-15年頃



襦袢(部分) 大正時代



帯(部分) 大正～昭和初期

❗ 5月12日～10月4日まで空調工事に伴い閉館いたします。ご了承下さい。

❗ 上記予定は都合により変更される場合があります。最新の情報はホームページでご確認下さい。

利用案内

- ◆ 開館時間 10:00～16:30 (各展示会期中2回、19:00まで開館 入館は閉館の30分前まで)
- ◆ 休館日 日曜日、祝日、夏期・年末年始、展示替の期間
- ◆ 入館料 一般 500円・大高生 300円・小中生 200円 *20名以上の団体は100円引、障がい者とその付添者1名は無料
- ◆ 交通 JR/京王線/小田急線 新宿駅(南口)より徒歩7分 都営地下鉄 新宿線/大江戸線 新宿駅(新都心口)より徒歩4分



文化学園服飾博物館

〒151-8529 東京都渋谷区代々木 3-22-7

TEL. 03-3299-2387

http://museum.bunka.ac.jp

学校法人 文化学園

文化学園大学/文化ファッション大学院大学/文化服装学院/文化外国語専門学校/文化出版局/文化学園服飾博物館